

## 東海地区国立大学教育学部新入生の進路意識に関する研究\*

若林 満 齋藤和志<sup>1)</sup>  
和田 実<sup>1)</sup> 中村雅彦<sup>2)</sup>

### I 問題と目的

先の報告(若林・和田・中村・齋藤, 1986)において, われわれは東海地区の国立大学の新入生の進路決定過程における個人的背景, 自己概念, 進路意識の特徴やそれらの関係をみてきた。職業社会化過程の構造モデルにおいても考えられているように, 大学進学を決定する際に, 学生は就職という進路についても考慮していると考えられる。特に, 教育学部や医学部はその傾向が強いことが示された。ここでは教育学部の新入生に限定しより詳しい分析を行うことを目的とする。

調査対象大学の中で, 名古屋大学の教育学部は教員養成系ではない。それに対して, 愛知教育大学, 岐阜大学, 静岡大学, 三重大学の教育学部は教員免許の取得を主な目的とした教員養成系大学といえる。したがって, 名古屋大学の教育学部の学生は他大学の教育学部の学生と異なった進路意識を持っていると考えられる。また, 愛知教育大学は教員養成専門の単科大学ということで, 他の教育学部と異なった特徴を持つであろう。しかし, 社会的状況や教職に対する考え方の変化等を考えると, 新入生の置かれた状況はより複雑であるかもしれない。教員の採用数の減少や教師に求められる資質の変化から, 「先生にでもなるか」といった考え方は通用しなくなってきていると考えられる。さらに, 時代の流れを反映し

て, 愛知教育大学をはじめ教員養成系大学では, 教員免許の取得を必修としない学科を新設することも検討されているといわれている。こうした状況にもかかわらず, 教育学部に入学してくる学生は, 逆に高い同質性(強い教職志望)を有しているとも考えられる。

大学を職業社会化過程の重要な一過程と考えたとき, 新入生の職業意識・進路希望を早くからつかんだ教育, 授業の方向づけが必要となるであろう。また, 大学受験に先だって, 大学自体もその特色を打ち出す必要があり, 特に「教員養成系ではない教育学部」としての名古屋大学教育学部の学生の特色を明らかにすることはその助けになると考えられる。また, 他大学の教育学部との比較だけでなく, 名古屋大学における教育学部の特色も考える必要があると思われる。本報告は先の報告(若林他, 1986)の結果をふまえて, 上記のような視点から教育学部新入生の特徴を明らかにすることを目的とする。

### II 方法

被調査者と調査の実施状況, 及び質問紙の内容と尺度の構成は先の報告(若林他, 1986)において詳しく紹介されているので, ここでは主に本報告の分析の対象となった被調査者について述べる。

#### 1. 調査内容

調査内容の概略は次の通りである。(a)個人的背景要因及び進路意識: 大学入試及び入学状況, 家庭状況に関する質問, 卒業後の進路やその決定時期に関する質問からなっている。(b)自己概念尺度: 自己イメージ(男性特性と女性特性)と自己能力評価(有能性, 協調性, 及び確実性)からなる。(c)職業意識尺度: 職業レディネス, 職業興味(教育的, 実際の, 技術的, 研究的, 芸術的, 及び指導的職業興味), そして職業志向(人間関係, 職務挑戦, 及び労働条件志向)からなる。(d)その他に, 学部学生一般に対するイメージ(男性特性と女性特性)と大学に対する満足度を問う項目からなっている。

\* 本研究のためのデータ処理は, 名古屋大学大型計算機センターのFACOM M-382によって行われた。

調査の実施にあたって協力していただいた愛知教育大学, 岐阜大学, 静岡大学, 名古屋大学, 三重大学の先生方に記して感謝の意を表します。

本論文の「I 問題と目的」は若林, 「II 方法」と「III 結果」は齋藤, 「IV 考察」は和田・中村によって分担執筆された。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期)  
2) 愛媛大学教養部講師

## 2. 分析対象

調査対象者は東海地区の5つの国立大学（愛知教育大学、岐阜大学、静岡大学、名古屋大学、三重大学）の教育学部に、1983年度に入学した新入生である。調査は同年4月から5月にかけて行われた。しかし、今回の調査では、三重大学の教育学部については定員330名のうち得られたデータが13.9%（46名）にしか満たなかったため、分析の対象から除いた。したがって、分析対象者の構成は、名古屋大学に関しては定員の100%の60名、愛知教育大学に関しては定員の35.8%の371名（内地留学と思われる人のデータを除いた）、静岡大学に関しては定員の24.1%の123名、岐阜大学に関しては定員の81.2%の276名の合計830名となった。

名古屋大学では平均年齢18.3歳、男性25名、女性35名であり、愛知教育大学では平均年齢18.2歳、男性132名、女性239名であり、静岡大学では平均年齢18.2歳、男性54名、女性69名であり岐阜大学では平均年齢18.3歳、男性118名、女性158名であった。

## III 結 果

### 1. 大学別にみた個人的背景要因の特徴

ここでは、通学の様態（宿所）、大学・学部の志望順位、現役一浪人の割合、両親の学歴、父親の職業、卒業後の進路希望、進路決定時期などの個人的背景要因の特徴についてみる。表1に結果を示した。

(1) 通学の様態 教員になるためには、地元の教員養成系大学を出たほうが良いという考えを反映してか、愛知教育大学、岐阜大学で自宅通学者がそれぞれ88.7%、75.7%と高率を示している。しかし、若林他（1986）の報告にもみられたように、静岡大学では自宅通学者は39.8%と低い割合である。人文学部の50名を含めた場合は33.5%とわずかに高くなるが、やはり地理的状況を反映してか他大学と比べ低い割合である。名古屋大学においては比較的高い割合を示している（75.0%）。最近の名古屋大学の合格発表においても、東海3県の合格者が増加しつつあることが報告されている。若林他の報告においても名古屋大学全体で69.2%と比較的高い自宅通学率が示されたが、教育学部の場合はそれを上回る割合である。また、本分析の対象となった4大学の教育学部では、男性に比べ女性のほうが多数を占めている。女性の場合「自宅から通える大学を」といった考えがあり、その現れとも考えられる。

(2) 大学・学部の志望順位 教育学部入学者においては、入学した大学の志望順位を1位とした者は71.7%（名古屋大学と岐阜大学）から82.0%（静岡大学）、学部の志望順位を1位とした者は80.2%（愛知教育大学）から87.8

%（静岡大学）と大学による差は小さいと思われる。若林他の報告では、全学部平均でみた場合、大学の志望順位を1位とした者は66.2%（岐阜大学）から77.7%（愛知教育大学）、学部の志望順位を1位とした者は79.8%（愛知教育大学）から89.0%（静岡大学）であった。愛知教育大学は単科大学であることも影響してか、大学と学部の志望順位の差が小さい。以上の結果から、教育学部入学者の場合、全体的な大学の志望順位1位の人の割合は全学部平均でみた割合に比べて高くなっていることがわかる。すなわち、一般的傾向として、教育学部入学者は大学及び学部の志望決定が第一志望で実現する確率が高いということであろう。名古屋大学に関してみると他の大学の教育学部との比較では明確な差異はあまりみられない。しかしながら、先の全学部を平均した名古屋大学の値をみると（教育学部の調査対象は名古屋大学の調査対象の7.2%にあたる）大学の志望順位を1位とした者は67.8%、学部の志望順位を1位とした者は86.1%であった。ところが教育学部入学者はこの数字と比べ、大学の志望順位では高くなり、学部の志望順位では低くなっているようである。穿った見方をすれば、名古屋大学の教育学部の学生は大学選択には満足しているが、学部選択にはさほど満足していないと言えるかもしれない。

(3) 現役一浪人の比率 先の若林他の報告と同様に、教育学部入学者の場合において現役率が最も高いのは愛知教育大学であり（83.2%）、最も低いのは名古屋大学であった（73.3%）。この結果は名古屋大学がいわゆる“難関校”であるということと、愛知教育大学では浪人を敬遠しがちな女子学生の占める割合が高いということによるものであろう。

(4) 両親の学歴 父親が大卒である割合が最も高いのは名古屋大学であり（43.3%）、最も低いのは岐阜大学であった（27.0%）。また、母親に関しても最も高いのは、名古屋大学であり（15.3%）、最も低いのは静岡大学（9.8%）であった。詳しい議論は先の若林他の報告に委ねるが、過去男女とも大学進学者の割合が増加を続け、また最近その傾向に陰りがさすと同時に専門学校が脚光をあびはじめた今日、両親の学歴と子供の進路選択との関係はより詳しい検討が望まれるところである。

(5) 父親の職業 親の学歴と同様に子供の進路に影響するひとつの要因としての親の職業があげられるであろう（小川・田中、1979、1980；田中・小川、1981、1982、1985）。父親の職業に関して、表1において一般公務員と会社勤務は、一般職、中級管理職、上級管理職を含むものとしてまとめられている。また、専門的職業は医療、教育、芸術・芸能、弁護士・会計士、その他を含んだものを教育とそれ以外に分けた。加えて、自営業、その他、

表1 大学別にみた個人的背景要因の集計結果〔教育学部のみ〕

		名大	愛教	静大	岐大	
宿所	自宅	75.0	88.7	39.8	75.7	
	自宅以外	25.0	11.3	70.2	24.3	
大学の志望順位	1	71.7	77.6	82.0	71.7	
	2	18.3	15.6	9.0	19.6	
	3	10.0	4.6	4.9	4.7	
	4	0.0	2.2	4.1	4.0	
学部の志望順位	1	83.3	80.2	87.8	84.1	
	2	15.0	14.1	8.1	12.7	
	3	0.0	4.3	0.0	2.2	
	4	1.7	1.4	4.1	1.1	
現役か浪人か	現役	73.3	83.2	82.9	77.5	
	一浪	23.3	15.1	16.3	20.3	
	二浪以上, その他	3.4	1.7	0.8	2.2	
両親の学歴(大卒)	父親	43.3	27.2	30.9	27.0	
	母親	15.3	10.3	9.8	13.1	
父親の職業	一般公務員	13.3	17.9	16.3	19.4	
	会社勤務	55.0	50.0	47.7	42.1	
	専門的職業	教育以外	0.0	1.4	0.8	1.8
		教育	11.7	7.6	8.9	8.4
	自営業	16.7	18.2	22.0	20.5	
	その他	3.3	4.9	7.3	7.7	
卒業後の進路希望	教師	幼稚園	0.0	0.0	1.7	1.1
		小学校	1.7	58.9	56.2	45.1
		中学校	8.3	18.9	19.0	24.9
		高等学校	25.0	8.9	1.7	11.4
	公務員	15.0	2.2	3.3	2.6	
	民間企業	20.0	5.1	5.8	5.9	
	自営業	5.0	0.8	4.1	2.2	
	大学院進学	15.0	2.4	3.3	3.7	
	その他	10.0	2.7	5.0	3.3	
	進路決定時期	小学生の頃	3.4	25.0	24.4	15.4
		中学生の頃	33.9	26.6	30.3	29.7
高校生の頃		50.8	31.3	27.7	33.3	
大学入試がせまった頃		3.4	9.8	8.4	9.5	
はっきりせず		8.5	7.3	9.2	12.1	

Note: 数値はすべて%を表す。名大: N=60, 愛教: N=371, 静大: N=123, 岐大: N=276。

を一群とした。

一般公務員が最も多いのは岐阜大学であり(19.4%)、最も少ないのは名古屋大学である(13.3%)。逆に、会社勤務が最も多いのは名古屋大学であり(55.0%)、最も少ないのは岐阜大学である(42.1%)。自営業は16.7%(名古屋大学)から22.0%(静岡大学)となっている。注目すべき点は、専門的職業である。最も低いのが愛知教育大学であり(9.0%)、最も高いのが名古屋大学であった(11.7%)。絶対的な度数に差があるにしても、名古屋大学における教育学部入学者の父親が専門的職業である場合、そのすべてが教育関係であったという点はひとつの注目すべき特徴であると思われる。

(6) 卒業後の進路希望 本報告の目的は教育学部間の比較検討であるので、卒業後の進路希望のうち教師と答えた者をさらに分類した。ここでのパーセントはあくまでも対象となったサンプルに基づくものである。名古屋大学は教員養成系ではなく学科も教育学科と教育心理学の2学科のみであり、取得できる教員免許は中学、高校に限られている。それを反映して高校教師志望は25.0%と最高であった。愛知教育大学の定員の構成は幼稚園教員養成課程2.9%、小学校教員養成課程67.6%、中学校教員養成課程12.6%、特別教科(数学、理科、書道)教員養成課程7.2%である。しかるに、本調査のデータをみると、小学校教師希望が58.9%、中学校教師志望が18.9%、高校教師希望が8.9%あった。小・中学校教員志望者は定員数をほぼバランスよく代表している。静岡大学の定員は幼稚園教員養成課程5.9%、小学校教員養成課程68.6%、中学校教員養成課程21.6%である。今回のデータをみる限り、小学校・中学校に関しては56.2%、19.0%と愛知教育大学と同じ傾向にあると思われる。岐阜大学では定員の割合は小学校教員養成課程61.8%、中学校教員養成課程23.5%、特別教科(理科)教員養成課程8.8%である。調査対象者でみると全体的な傾向は愛知教育大学、静岡大学と似ているが、高等学校教師希望者が11.4%とやや多い。

その他の進路希望をみると、名古屋大学教育学部の特徴の一端がうかがわれる。公務員(15.0%)、民間企業(20.0%)、大学院進学(15.0%)希望者が他大学に比べて多い。実際、昭和53年度から昭和59年度までの就職状況の概要をみると(昭和61年度名古屋大学教育学部学生便覧)、公務員は9.7%、民間企業23.5%、大学院進学は4.0%であった。公務員と大学院進学者は今回の希望者の割合よりも低い、民間企業に関してはほぼ同程度の割合で実現されている。また、実際に教育関係に就職した者は38.4%であり、内24.0%が高等学校であった。これは、高等学校教師希望者25.0%という数字とほぼ対

応する。

(7) 進路決定時期 どの大学においても78.4%から82.9%の者が高校生の頃までに決定している。特に、愛知教育大学と静岡大学においては小学生の頃に決定したと答えた者がそれぞれ25.0%、24.0%と高い割合を示している。岐阜大学も比較的早い時期に決定したと答えた者が多かったのに対して、名古屋大学では中学生の頃、高校生の頃に決定したと答えた者がそれぞれ33.9%、50.8%と高い割合を示している。教師希望者は比較的早い時期に進路決定(具体的な決定とは言えないであろうが)を行っているのに対して、名古屋大学へ入学した者は高校生の頃の進路指導によって決定をしている可能性が高いと考えられる。

## 2. 大学別にみた自己概念の特徴

ここで用いた自己概念測度は、職業的能力の自己評価と男性特性一女性特性次元で捉えた自己イメージの2つから成る。尺度の内容、構成等に関しては、若林・後藤・鹿内(1983)と先の若林他(1986)の報告を参照されたい。各大学の平均と標準偏差、及びt検定の結果を表2に示した。

(1) 自己能力評価 (a)有能性:ここでいう有能性とは、分析的能力と行動的能力が結合した、総合的な問題解決における有能性の自己認知を意味している(若林他, 1983)。先の報告においては、教育学部の有能性得点は10学部のうち5番目であった。すなわち、有能性を構成する指導力、企画力、創造性、積極性、社交性、口頭表現能力、判断力、折衝力において、教育学部の学生はほぼ中程度という結果であった。教育学部のみに関する結果では、大学間で有意な差異はみられなかった。

(b)協調性:これは協調性、応接処遇能力、共感能力、柔軟性、明朗性の項目から成っており、他人とうまくやっていく、という協調性の概念が中心となっている。先の報告でみる限り、教育学部の協調性得点は最高であった。その中でも愛知教育大学の得点が最も高く、岐阜大学との間に10%水準での傾向差がみられた。統計的には有意とは言えないが、相対的に教員養成系大学の学生のほうが協調性得点が高く、名古屋大学の教育学部は最も低得点であった。

(c)確実性:これは、与えられた仕事を間違いなくやりとげる、という作業の確実性を意味しており、具体的には確実性、迅速性、能率性、責任性、持続力、細心性といった項目から成っている。先の報告では教育学部はほぼ中間であり、医学部で高く、農学部で低いという結果であった。教育学部に関してみると、名古屋大学と岐阜大学の間、愛知教育大学と岐阜大学との間に5%水準で差がみられた。岐阜大学における確実性得点の低さが特

表2 大学別にみた自己概念測度の平均と標準偏差（教育学部のみ）

		名大	愛教	静大	岐大
自己能力評価	有能性 <8項目>	31.12 (5.91)	31.40 (7.58)	30.50 (7.82)	31.22 (6.90)
	協調性 <5項目>	22.05 (4.35)	22.76 (4.42)	22.81 (4.61)	22.08 (4.50)
	確実性 <6項目>	27.08 (5.22)	26.14 (5.00)	26.21 (5.72)	25.30 (5.15)
					p<.05
自己イメージ	M得点 <9項目>	33.68 (7.53)	36.15 (8.31)	34.54 (8.24)	34.53 (8.08)
	F得点 <10項目>	38.22 (6.19)	38.00 (6.47)	37.44 (7.06)	38.11 (7.47)

Note: ( )内は標準偏差を示している。また、得点が高いほど、その特性を強く持っていることを表す。

徹的であると思われる。

(2) 自己イメージ 先の報告(若林他, 1986)によればM(男性特性)得点は医学部では高く、文学部、農学部では低いという傾向がみられていた。教育学部に関してみると、愛知教育大学が他の大学に比べて有意に高い得点を示していた(静岡大学との間では10%水準の傾向であったが、名古屋大学と岐阜大学との間にはそれぞれ5%水準で有意であった)。統計的には有意ではないが、名古屋大学教育学部の学生は男性特性得点が最も低かった。

F(女性特性)得点には大学間での差異はみられなかった。M得点とF得点の間には、若林他(1983)においては0.27(N=875, p<.001), 今回のデータにおいては0.25(N=830, p<.001)と有意な正の相関がみられる。こうした点を考え合わせると、愛知教育大学におけるM得点の高さというものがひとつの特徴と考えることができよう。

### 3. 大学別にみた進路意識の特徴

進路意識測度としては、職業レディネス、職業興味、職業志向の3側面が取り上げられている。大学ごとの平均、標準偏差、検定結果を表3に示した。

(1) 職業レディネス 職業レディネスとは、職業選択への関心、選択範囲の限定性、選択の現実性、選択の主体性、自己知識の客観性といった下位概念で構成されてお

り、「職業につくことに対し、どの程度“成熟”した考えを持っているかを、ある一定の時間と状況の中でとらえようとするもの」である(若林他, 1983)。

先の報告(若林他, 1986)では医学部に次いで教育学部は高い得点を示していた。その教育学部のなかでも愛知教育大学と静岡大学は特に高く、名古屋大学は最も低い得点であった(名古屋大学と岐阜大学の間には有意な差異はみられなかった)。このことは教職教育に特定している愛知教育大学の新入生において、職業につく“心理的準備状態”が最も強く形成されていることを意味している。逆に、将来の進路が多様である名古屋大学教育学部の学生では、この傾向は相対的に弱いということである。

(2) 職業興味 職業興味測度は6つの下位尺度から成っている。教育的、実際の、技術的、研究的、指導的職業興味である。

まず、教育的興味についてみる。先の報告(若林他, 1986)では、教育学部のみがニュートラル・ポイントを上回るという結果が示されていた。ここでも、大学間に差異は認められずに、すべての大学でニュートラル・ポイントを上回るものであった。“教育的”というなかには、教師(幼稚園、小学校、中学校、高等学校、養護学校等)だけでなく、カウンセラー、児童心理や青年心理の研究者、教育制度や教育問題の研究者も含まれているという点も記しておく必要があるであろう。

表3 大学別にみた進路意識測度の平均と標準偏差〔教育学部のみ〕

	名大	愛教	静大	岐大
職業レディネス<18項目>	p<.01 51.93 (6.19) p<.05	54.27 (6.37)	54.12 (6.71)	p<.01 52.71 (6.15) p<.05
職業興味 教育的職業興味 <10項目>	32.03 (7.00)	32.50 (7.18)	31.95 (8.29)	32.05 (6.96)
実際の職業興味 <5項目>	10.53 (4.58)	10.12 (3.98)	10.60 (4.56)	p<.1 10.78 (4.32)
技術的職業興味 <5項目>	9.02 (4.19)	p<.1 10.21 (4.61)	10.54 (4.57)	p<.05 10.74 (5.07) p<.05
研究的職業興味 <5項目>	11.63 (4.75)	12.32 (5.17)	11.56 (4.47)	12.18 (5.03)
芸術的職業興味 <5項目>	12.58 (4.34)	12.32 (4.28)	11.99 (4.46)	12.49 (4.30)
指導的職業興味 <5項目>	10.50 (4.00)	9.84 (3.49)	9.77 (3.70)	10.19 (3.68)
職業志向 人間関係志向 <14項目>	p<.1 49.25 (10.88)	51.29 (9.79)	52.25 (10.51)	p<.05 49.60 (10.65) p<.05
職務挑戦志向 <9項目>	26.99 (6.08)	p<.05 26.04 (6.15)	27.46 (5.95)	p<.05 25.79 (6.45)
労働条件志向 <5項目>	14.20 (4.39)	p<.1 15.31 (4.35)	15.29 (4.75)	p<.1 15.36 (4.73)

Note: ( )内は標準偏差を示している。また、得点が高いほど、その特性を強く持っていることを表す。

次に、実際の職業興味についてみる。これは、経理士・税理士、経済統計や調査の専門家、司法書士、会計監査や財務の専門家、職業安定所や税務所の調査官といったものを含んでいる。こうしたことを反映して、先の報告では経済学部のみがニュートラル・ポイントを上回る興味を示していた。教育学部に関してみると、岐阜大学と愛知教育大学の間には10%の傾向差がみられたのみであった。

技術的職業興味は、航空機の整備・検査技師、電気や電子工学機器の技術者、機械や自動車などの設計技師、

土木・建築関係の技術者、化学工業プラントの技術者などに関する興味である。このことを反映して、先の報告では工学部のみがニュートラル・ポイントを上回っていた。教育学部に関してみると、いくつかの差異がみだされた。一貫しているのは名古屋大学の得点が低いということである。愛知教育大学との間は10%の傾向差であったが、静岡大学、岐阜大学との間には5%水準の差がみられた。

また、研究的、芸術的、指導的職業興味においては大学間に差はみられなかった。

(3) 職業志向性 職業志向性は人間関係志向、職務挑戦志向、労働条件志向の3次元で構成されている。

人間関係志向性は教育学部で最も高いということが先の若林他の報告で示された。その教育学部の中でも静岡大学と愛知教育大学が高い得点を示している。岐阜大学と愛知教育大学、静岡大学との間にはそれぞれ5%水準で有意な差がみられた。

また、職務挑戦志向性は教育学部で最も低いということが先の報告で明らかになっている。本分析の結果では、静岡大学の教育学部が比較的高い得点を示している。静岡大学と愛知教育大学、岐阜大学との間には5%水準で

有意な差が示されている。名古屋大学は平均値をみると静岡大学に次ぐ値であるが、その差は有意とはいえない。

労働条件志向性は文学部、理学部で得点が低かった。教育学部は中程度とあってよいであろう。教育学部の中でみると10%水準の傾向差であるが、名古屋大学が愛知教育大学、岐阜大学に比べて低い得点であった。

#### 4. 大学別にみた満足度、及び関連諸測度の特徴

ここでは大学に対する満足度とそれに関連するいくつかの測度、及びそれらの関連を検討することで各大学の特徴をみている。ここで扱う測度は、先の報告（若林他、

表4 大学別にみた満足度及び関連諸測度の平均と標準偏差〔教育学部のみ〕

	名大	愛教	静大	岐大	
満足度	5.32 (1.19)	5.15 (1.45)	4.98 (1.62)	4.81 (1.54)	p<.05 p<.01
大学の志望度	3.62 (0.66)	3.69 (0.66)	3.69 (0.74)	3.59 (0.76)	p<.1
学部の志望度	3.80 (0.51)	3.73 (0.60)	3.80 (0.63)	3.80 (0.52)	
共通一次得点	830.18 (25.06)	742.16 (43.13)	715.39 (40.73)	721.76 (52.67)	p<.001 p<.001 p<.001 p<.001
主観的進路実現確率	56.27 (20.05)	60.00 (24.82)	65.33 (56.69)	60.79 (23.30)	p<.1
イメージギャップ M得点	12.87 (6.29)	11.66 (5.40)	12.96 (8.12)	10.80 (5.83)	p<.05 p<.1 p<.01
F得点	12.88 (5.76)	12.45 (5.94)	13.24 (6.60)	12.13 (6.39)	p<.1
全体	25.75 (10.76)	24.11 (9.83)	26.02 (12.98)	22.93 (10.56)	p<.1 p<.01

Note: ( ) 内は標準偏差を示している。また、得点が高いほど、その特性を強く持っていることを表す。

1986)での分析をふまえて、満足度、大学・学部の志望度(志望順位に従って高得点となる)、共通一次得点、進路実現の主観的確率、及びイメージギャップ得点とした。イメージギャップ得点とは、本人の自己イメージと入学学部の学部学生一般に対するイメージ評価との差の絶対値をとったものであり、男性特性得点(M得点)と女性特性得点(F得点)ごとに求めた。各測度の平均、標準偏差、検定結果について表4に示した。

(1) 大学別にみた満足度、及び関連諸測度の特徴 満足度に関してみるとすべての大学においてニュートラル・ポイントを上回っている。名古屋大学が最も高く(岐阜大学との間が5%水準で有意)、次いで愛知教育大学が高い値を示している(岐阜大学との間が1%水準で有意)。

大学・学部の志望度は表1に示された大学・学部の志望順位を基に、1位であるとした者に4点、2位であるとした者に3点、3位であるとした者に2点、4位であるとした者に1点を与えたものである。表1の結果を反映し、大学の志望度では静岡大学と愛知教育大学が高く、全体として大学の志望度より教育学部の志望度のほうが高い。教育学部における大学間の差異はさほど明確ではないが、大学の志望度において愛知教育大学のほうが岐阜大学よりも高いという傾向がみられた。

共通一次の得点は被調査者の自己報告によるものであり、かつ分析対象の人数がやや異なっているという点で、若干のバイアスを含んでいると考えられる。対象者の数は、名古屋大学60名、愛知教育大学363名、静岡大学151名、岐阜大学261名であった。得点は名古屋大学、愛知教育大学、岐阜大学、静岡大学の順に高く、岐阜大学と静岡大学の間以外には、0.1%水準で有意な差がみられた。

主観的進路実現確率は、表1に示された卒業後の希望進路にどの程度の確率で進めるとするかを、0%から100

%までの11段階でたずねたものである。結果は静岡大学で最も高く、次いで岐阜大学、愛知教育大学、名古屋大学の順になっている。静岡大学と名古屋大学の間10%の傾向差がみられた。表1に示されているように、他の大学と比べて名古屋大学の学生の進路希望は教師以外のものが比較的多い。名古屋大学教育学部の学生には、実際に就職できるかどうかということに加えて、何になるかということに関する不確定性も影響していると考えられる。これが進路実現確率を低めている原因であろう。

表2において、自己イメージは男性特性-女性特性の次元で測定された。同時に、自分の所属する学部の学部一般に対するイメージが同一の項目を用いて測定された。ここでのイメージギャップとは、自己イメージと認知された学部学生一般のイメージとの差の絶対値を意味する。この差得点は男性特性項目、女性特性項目ごとの和をそれぞれM得点、F得点として示した。また、その合計点を全体として示した。このイメージギャップ得点はある種の適応感のひとつの指標と考えることができよう。M得点についてみると岐阜大学、愛知教育大学、静岡大学、名古屋大学の順にギャップが大きくなっている。F得点は、表2の結果と同様にあまり差がみられなかったが、静岡大学のほうが岐阜大学よりもギャップが大きい傾向が示されたのみである。M得点とF得点はある程度の正の相関があるので、全体的にみてもM得点での傾向が表れているといえよう。静岡大学、名古屋大学でギャップが大きく、次いで愛知教育大学、岐阜大学となっている。このことは静岡大学や名古屋大学教育学部入学の新入生が、学部学生一般に比べ自分が男性特性イメージ(頼もしい、たくましい、指導力のあるなど)において劣っている、と認知する傾向が強いことを意味するものである。

(2) 大学の満足度と関連諸測度との関係 先の報告(若林他, 1986)でみられたように、教育学部においては、

表5 大学別にみた満足度と関連諸測度との関係 [教育学部のみ]

	名大	愛教	静大	岐大
大学の志望度	.30 *	.38 ***	.06	.32 ***
学部の志望度	.13	.22 ***	.12 *	.20 ***
共通一次得点	.10	.11 *	.05	.04
主観的進路実現確率	.26 *	.23 ***	.33 ***	.25 ***
イメージギャップ M得点	-.20	-.18 ***	-.06	-.00
F得点	-.30 **	-.17 ***	-.07	-.08
全体	-.28 *	-.20 ***	-.08	-.05

Note: 有意水準, \* p < 0.05, \*\* p < 0.01, \*\*\* p < 0.001.



共通一次得点を除いた5つの測度と満足度との間に有意な相関が示された。これは他の学部ではみられなかった特徴である。本報告では卒業後の進路希望との関係からも、他の学部との違いを考慮ができると思われる。ここでは進路実現の主観的確率との関係もみることにした。大学別にみた満足度と関連諸測度との相関係数と無相関検定の結果を表5に示した。

表5から、大学生生活の満足度と他の諸変数との相関は愛知教育大学において最も顕著であることがわかる。各変数ごとにみると、大学・学部の志望度は4大学のうち3大学で有意な相関を示した。主観的進路実現確率はすべての大学において有意な相関を示している。希望進路に進む確率が高いと答えた者は現在の学生生活が満足だと答えている。イメージギャップ得点に関してみると、愛知教育大学と名古屋大学で有意な負の相関がみられた。学部学生一般に対するイメージと自己イメージの差が小さいほど満足度が高いということであり、イメージギャップ得点が一種の適応感の尺度となっていることを物語っている。こうした関係は静岡大学と岐阜大学ではみられなかった。しかし、ギャップ得点をみると、静岡大学は最も高く岐阜大学は最も低いという明確な差異が存在するのである。このような結果はギャップ得点の天井効果に一部起因するものと考えられる。

愛知教育大学においては、新入生の希望が限定的で専門化された大学の機能(教員養成大学)にマッチする(高志望順位、高進路実現可能性、低いイメージギャップなど)場合、大学生生活満足は高くなり、マッチしない場合満足感が低くなるという一貫した相関関係がみだされている。しかし、他の大学ではそれほど明確な関係はみられない。結論として、どの大学においても大学が学部の志望順位が高く、将来の進路の実現可能性が高いと判断されることが、大学生生活満足度に一貫した影響を与えていることがわかる。

#### IV 考 察

名古屋大学の教育学部の特徴を中心に検討してみよう。また、愛知教育大学、静岡大学と岐阜大学の教育学部に関しては、それを教員養成系として一括してよいかという点がここでの検討の課題である。塗師・撫尾(1974)では、大学選好の因子分析において教員養成大学群、旧制帝国大学群、新制国立総合大学群が分離して抽出されている。教育学部のみを対象とした本研究の結果も、全体的にみれば同様な分類枠組みの中で理解可能であると考えることができる。

#### 1. 個人的背景要因の特徴

名古屋大学教育学部と教員養成系大学(愛知教育大学、静岡大学教育学部、岐阜大学教育学部)との差異がいくつかの点でみられた。名古屋大学教育学部は他の大学に比べて現役率が低く、すでに新入生の時点において卒業後の希望進路では公務員、民間企業、大学院進学を希望するものが多かった。また、進路決定時期が遅いのも名古屋大学教育学部の学生のひとつの特徴であると考えられる。教師になろうと考えるものは比較的早い時期に決定を行い、地元の教員養成系大学を目指すと考えられるならば、名古屋大学の学生は教師になるという目標が相対的に希薄で、高校時代になってやっと進路(大学及び職業)を決定しているようである。

親の職業の影響に関しては、小川・田中(1979, 1980)や田中・小川(1981, 1982, 1985)の一連の研究があげられる。そこでは、親の継承期待、子供の継承希望、親との同一視等の概念が中心に取り上げられている。また、進学に際しても、家族や教師といった人的影響源による影響が報告されている(淵上, 1984a, 1984b)。本研究はそのことが中心目的ではないので明確には言えないが、専門的職業の中だけでみる限り、教育学部入学者の父親は教育関係の職についている割合が高いといえよう。教師という職業を考えた場合、単に親の職業との関連を検討するというだけでなく、本人の人生の中で出会った教師の影響をも考慮する必要があるであろう。

名古屋大学以外の3大学を比較すると、静岡大学における自宅通学者の少なさ、岐阜大学における大学志望順位を1位とした者の低率と進路決定時期の遅さといった差異点があげられる。このことは愛知教育大学、静岡大学教育学部、岐阜大学教育学部が教員養成系として一括するには、各学部の特徴が強すぎるということを示すものであろう。

#### 2. 自己概念、進路意識の特徴

名古屋大学教育学部の学生の特徴として、自己能力評価の確実性の高さがあげられる、これは“難関校”である名古屋大学の受験生の特徴とも考えられる。すなわち、“難関校”の受験に際しては、対外的有能性や協調性よりも与えられた仕事は間違いなくやりとげるという確実性が最も関連するであろうと考えられるからである。

また、名古屋大学教育学部新入生の自己のイメージのM得点の低さ、職業レディネスの低さは、教師を目指す教員養成系大学の学生との差の表れと考えられる。これは就職に対する“未熟さ”、すなわちモラトリアム傾向の強さを示すものであろう。さらに、技術的職業興味の低さは、教員養成系大学の学生の中には理科系的興味を

持つ者が多数おり、そのための差であると考えられることができる。名古屋大学教育学部の学生の人間関係志向性の低さは、やはり、教職希望者の少なさと関係からであろうか。また、労働条件志向性の低さも、M得点、職業レディネス得点の低さと関連したモラトリアム傾向の表れと考えることができよう。教員養成系学部のなかでみると、岐阜大学がどちらかといえば名古屋大学に近い傾向を示しているように思われる。

### 3. 満足度及び関連諸測度の特徴

名古屋大学教育学部の学生の満足度は高いが、主観的進路実現確率も低いという結果であった。また、静岡大学教育学部の学生はイメージギャップが大きく、岐阜大学教育学部の学生は小さいという結果も見い出された。さらに、名古屋大学と愛知教育大学においては、満足度とイメージギャップとの間に負の相関がみられた。先の若林他の報告では教育学部以外ではこうした関係はみられなかった。

次に教育学部生全体の職業興味という点から考えてみると、名古屋大学の教育学部の新入生は教育的職業興味において、他大学の教育学部新入生と何ら差はなかった。むしろ、他大学の教育学部学生と比べて高い水準にあり、その面では教育学部生全体の中で高い同質性を示していると考えられる。また、他の職業興味面で若干の差異が見い出されたが、これらは、学科の構成によるものとも考えられる。また、すべての大学を通じて教育学部の新入生は、他学部の新入生に比べ高い教育的職業興味と人間関係志向性を示した。名古屋大学の教育学部の新入生も、この点では他の大学の教育学部の新入生と同じであり、したがって全体として東海地区国立大学教育学部新入生の職業興味は高い同質性を示しているとみてよいであろう。

### 4. まとめと今後の課題

名古屋大学教育学部の新入生は、教員養成系大学の新入生と比べ同質性と異質性を兼ねそなえているという可能性が示された。この問題の鍵は、名古屋大学教育学部において教職につく学生とつかない学生の一般的特徴を明らかにすることにある。一般的に言えば、教員養成系ではない名古屋大学教育学部に入学した学生の多様な進路を決定する条件を明らかにしていく必要がある。また、教員養成系学部と比べて、進路の多様性をもつ名古屋大学教育学部は、モラトリアム傾向の強い学生が多いということが示された。これらのことは職業社会化過程の主体である学生の問題であると同時に、そうした様々な学生が教師になった場合の生徒に及ぼす教育的効果の

問題にまで及ぶことになるであろう。愛知教育大学の特徴を考えた場合に、教職志望の新入生＝学生生活満足、それ以外の新入生＝不満足という図式がうかびあがってくる。特に教職という問題を考えた時、大学を専門化することは、大学受験（輪切り現象）や就職問題（多様性の減少）という点で、いろいろ問題を含んでいるものと考えられる。

また、モラトリアム傾向の強い名古屋大学教育学部の学生の自己概念、進路意識の変化の過程を検討することも興味深い課題である。教職につく者とそうでない者との差異はどこに存在するのか。差異が存在するとすれば、それは入学以前なのか、それとも大学在学期間中の出来事と深い関係があるのかなど、いくつかの疑問が湧いてくる。本研究の場合、教育学部新入生一般の特徴を探る目的上、調査は探索的なものとなった。今後、大学進学、職業選択にみられる一般的傾向を明らかにすると同時に、実際の大学教育と関連させながら、新入生の自己概念や職業意識（進路選択の内的規定要因）がどのように変化していくかを吟味することも必要であろう。まだ探索的段階ではあるが、名古屋大学教育学部の学生に関しては、本研究の対象者に焦点を当て縦断的データを収集しつつある。この分析を通してさらに検討を進めていく予定である。

## 文 献

- 洲上克義 1984a 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.
- 洲上克義 1984b 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232.
- 塗師 閔・撫尾知信 1974 大学選好の構造とその発達 教育心理学研究, 22, 216-226.
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 小川一夫・田中宏二 1980 父親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331.
- 田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, 29, 166-170.
- 田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影響—子の認知した親の期待と職業モデル— 教育心理学研究, 30, 257-262.

田中宏二・小川一夫 1985 職業選択に及ぼす親の影響  
—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について—  
教育心理学研究, 33, 171-176.

若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネス  
と職業選択の構造—保育系・看護系・人文系女子短  
大生における自己概念と職業意識との関連— 名古  
屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 30, 63-98.

若林 満・和田 実・中村雅彦・斎藤和志 1986 東海

地区国立大学新入生の進路意識に関する研究 名古  
屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 33, 247-278.

(1986年7月31日 受稿)

注) 各大学の定員は昭和60年度全国大学一覧, 名古屋大  
学教育学部の就職状況は名古屋大学教育学部・名古屋  
大学教育学研究科昭和61年度学生便覧による。

## ABSTRACT

### A STUDY ON THE CAREER ORIENTATION AMONG FRESHMEN ENROLLED IN THE FACULTY OF EDUCATION OF THE NATIONAL UNIVERSITIES IN THE TOKAI REGION

Mitsuru WAKABAYASHI, Kazushi SAITO, Minoru WADA, and Masahiko NAKAMURA

The preceding study (Wakabayashi, et al., 1986) examined the university and the departmental differences in the personal background variables, self concept, and consciousness of career orientations among new students (freshmen) enrolled in the five national universities in the Tokai region. The present study was designed based on the preceding analyses to explore institutional differences in more detail, focusing solely upon freshmen enrolled in the faculty of education in each university. Especially, students' characteristics in the Faculty of Education of Nagoya University (n=60), which is regarded as a "non teacher-training school" in Tokai area, were subject to close examinations in comparison with those in the "teacher-training schools," namely, Aich University of Education (n=371), a specialized teacher training school, and the Faculty of Education of Gifu University (n=267) and Shizuoka University (n=123).

The composition of instruments in the questionnaire was as follows. (1) *Personal background* variables included sex, the time of career selection, expected courses after graduation, and so on. (2) A *self concept* instrument consisted of self-image and self-evaluated competence scales. (3) *Occupational attitudes* included occupational readiness, occupational interest, and job orientation instruments. (4) The *image of*, and *satisfaction with the school* entered were also measured.

Major characteristics of the freshmen enrolled in the Faculty of Education of Nagoya University were found to be as follows. (1) Examinations on the personal background measures suggested that among subject students at Nagoya University, the rate of uninterrupted enrollment from the highschool (*Genki*) was lower, and the time of university selection for entry was much later, compared with the colleagues in other universities. Moreover, it was found that their fathers engaged in educational occupations at significantly higher ratio, when they were categorized as specialists. (2) For the self concept measures, it was found that the self-evaluated accountability was higher among Nagoya University freshmen. In addition, the levels of occupational readiness, and orientations toward human relations and work conditions in future occupations were found significant lower. (3) Among subject freshmen in Aich University of Education and Nagoya University, negative relationship between satisfaction with the university life and the "image-gap" (an discrepancy between the self- and the school- image) was demonstrated as hypothesized. (4) In terms of occupational interests, freshmen enrolled in the Faculty of Education of Nagoya University and those in other universities were found basically homogeneous. However, freshmen in Nagoya University seem to have stronger *moratorium* tendency, compared with those in other universities.

In conclusion, it was stressed that the longitudinal study on actual occupational choice processes needs to be done to confirm the above findings.